

西日本シティ銀行が運営するウェブサイトを「コラボラ」からSDGs推進に積極的な企業の具体的な取組み事例をダイジェストでご紹介します。

「国産材の有効活用に向けて日向モデルがもたらす好循環」
— 中国木材株式会社 (広島県呉市/広島支店お取引先)



中国木材株式会社 代表取締役社長 堀川智子さん

「ウッドショック」という言葉がある。コロナ禍の影響で日本向けの輸入材と原木の供給量が大きく減ったことで、木材の価格高騰や納期遅延などが発生している現象を指す。輸入材の供給が足りなくなったからと急に輸入量を増やそうとしても、日本の木材の買付け力は海外には遠く及ばず、国内の林業振興は大きな社会課題と言える。加えて、日本の国土の約3分の2が森林であり、豊かな森林の管理・維持は、災害防止や水源確保、生物多様性の保全といった重要な意味を持つ。

今回ご紹介する中国木材株式会社(以下「中国木材」)は、広島県呉市に本社を構え、木造住宅の構造材メーカーとしては国内屈指の規模を誇る。山林事業は植林して商品化できるまで50年かかると言われるロングスパンの事業。同社が歩んできた歴史、そして50年先を見据えた取組みを見ていくと、国内の木材産業や林業、さらにはカーボンニュートラルまで、SDGs推進に向けたヒントが見えてくる。

中国木材は1953年創業。製紙用パルプの原料となる木材チップの製造・販売を主業として立



(株)西日本シティ銀行
広報文化部
吉留 浩二



中国木材株式会社 日向工場副部長 林亮司さん

の市場側にも、さまざまな課題があります。わが社の伊万里の工場(同社初の国産材工場)でも、累積損失が最大で76億円まで積み上がりました。戦後に植林されたスギやヒノキがちょうど伐期を迎えていて、人気のヨーロッパ材と比較しても遜色ない特性がある。あとは安定的な量と質を確保して供給できれば、しっかりととしたビジネスになる。そのためには大規模な工場が必要だと考えました(堀川さん)。

想いを結実させ、2014年10月、ついに中国木材は日向工場の操業を開始する。宮崎県日向市細島港。総敷地面積16万坪(東京デイズニールンDがすっぽり入る広さ)の広大な敷地を持つ日向工場。ご案内いただいたのは同社日向工場副部長の林亮司さん。「日向工場の仕組みを、我々は



中国木材 日向工場 中径木製材工場の様子



【企業 DATE】
中国木材株式会社
住所：広島県呉市広多賀谷 3-1-1
TEL：0823-71-7147
http://www.chugokumokuzai.co.jp

「日向モデル」と呼んでいます。まず我々は、山から出る木材をすべて受け入れます。大きいもの(大径木)から、製材できない小さいもの(小径木)まで全部です。山からまとめて持ってきてもらったものを日向工場の中ですべて料理して、その最後に出てきた木の皮とかおが粉とかがバイオマス発電の燃料になるんです。国産材は供給量も、価格も、品質も安定させるのが難しい。そこを日向工場はすべてクリアできるように、まずは、大量の原木在庫を持つことで供給側の安定性を確保しています。さらに、加工材や集成材など製品の仕掛かり品を大量に保有しています。我々は原木の供給側と製品の利用側との間に入って、住宅用

ち上がり、高度経済成長期に主業を製材業へとシフト。特に北米からの輸入材「ベイマツ」を安定的に供給できる体制を確立し、全国で1年間に建築される木造住宅の約3軒に1軒が中国木材の製品を使用していることになるとのこと。ベイマツで大きな成功を収めている中国木材だが、近年、国産材の供給へとシフトしている。それはなぜか? 「実は1990年代に、今回のウッドショックと同じような状況が生まれました。アメリカで、環境意識の高まりから、森林の木を切ることに制約が生まれ、ベイマツの供給量が減り価格が高騰したんです。私たちはベイマツの供給力不足を心配して、世界中を探し回りましたが、これぞ! というものがない。いろいろ試行錯誤していると、ふと足元を見たら、日本には、戦後に植えられたスギやヒノキがたくさん育っていて、ちょうど伐期を迎えている。じゃあ、国産材やってみようって取り組み始めました」と語るのは中国木材株式会社代表取締役社長の堀川智子さん。

とはいえ、国産材をとりまく環境は決して楽観視できないのでは? 「原木の供給側にも、製品

構造材の供給と価格を安定化させるよう、緩衝材のような役割をしています」と林さんは解説してくれた。日本の林業が慢性的に抱える課題を劇的に解決する「日向モデル」は、業界に大きなインパクトを与えたことは容易に想像できる。ちなみに、宮崎県は30年連続でスギの生産量日本一、2位に秋田県が続く。中国木材は、日向モデルの第2弾として、秋田県能代市に新工場を建設し2024年春の本格稼働を目指している。

堀川社長はこう言う。「木材を製品化することでそれまでに吸収したCO₂は固定化されます。今、カーボンニュートラルが叫ばれていますが、森林はCO₂の吸収源であり、伐採して建物に使用えば吸収したCO₂を長期間固定化できます。伐採した森には新たに植林して、若い木がどんどんCO₂を吸収していきます。私たちが取り組んでいる国産材の活用は、日本の林業を守り育て、その結果、健康に循環する森林が増えてCO₂を固定化した製品が売れる。その好循環がカーボンニュートラルの実現につながっていく、そんな視点で捉えています」。

